

終末期医療の講演を医師や市民にする機会が多くある。そこでよくする質問がある。それは「死後の世界はあるのか、無いのか」である。私は「無い派」であるが、世間はどうかだろう、という単純な動機で聞いてまわってきた。世間ではよく「あの世から見守ってください」とか「あの世で待っていてください」という言葉が使われるので、大半の人は「ある派」だろうな、と勝手に思っていた。果たしてアンケート結果は医師も市民も同じで、ある派と無い派はほぼ同数である。これは全国どこで聞いても同じ結果になる。もちろん僕の話を聞く人という点でバイアスがかかっているが、僕にとっては意外な結果だ。

医者になって40年近くになる。2500人を看取ってきた。死亡診断書を2500通書いたということだ。臨終に接していつも思うのは、旅立ったばかりの目の前にいる人は今、僕をどこから見ているのか、それとも見ていないのか

随想

死後の世界はあるのか

長尾 和宏



だ。この人の魂はこれからどこに行くのか、どこにも行かないのか。永遠に答えが出ない疑問であることは分かっている。でも往診の帰り道で必ず考えてしまう。

「人は死なない」という本が売られている。そのタイトルを見るたびに、「死後の世界がある」と考えたほうが救いがある、と思う。若い時は無神論者で「無い派」であつても、老人と呼ばれる年になると「あつて欲しい」という思いも芽生える。自分にとつても死は通過点であつて欲しい。

今年の桜は例年より少し早く終わった。桜吹雪を見るたびに、花びらの一枚一枚が自分が看取った患者さんのお顔に見えてしまうのは職業病だろうか。密かに2500人の鎮魂を祈る。でも魂を想起すること自体が「ある派」なのかなとも思う。「散る桜、残る桜も散る桜」という俳句が頭から離れない。これ以上現実を直視しない方が幸せなのかな、などと考えている。(長尾クリニック名誉院長)